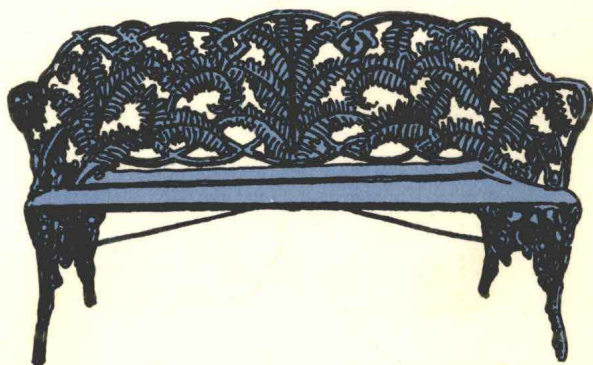


戸板康一



ちよつといい話

ちよつといひ話

戸板康二



文藝春秋

ちよっといひ話

一九七八年一月十五日 第一刷

定価 九〇〇円

著者 戸板康二

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地
電話 東京 二六五―一二二一

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷
製本所 中島製本

万一落丁・乱丁があればお取換えいたします

著者略歴

一九一五年、東京に生まれる。慶応義塾大学国文学科卒業。日本演劇社編集部長を経て演劇評論家、作家。直木賞、菊池賞、芸術院賞受賞。
著書 「忠臣蔵」「尾上菊五郎」「歌舞伎事はじめ」「女形」「団十郎切腹事件」「五月のリサイタル」

ち
よ
っ
と
い
い
話

目次

	IV	III	II	I
後記				
279	223	129	93	5

装
幀

坂
田
政
則

I

正宗白鳥さんには、戦後、軽井沢から上京する時、リュックサックに、茶だんすの引出しを一つずつ入れて運んだという伝説がある。

リュックサックが、さかさまだったという伝説がある。

銀行に金をあずけた時、通帳の帳尻を確認しなかったら、つけ落ちになっていたという経験があって、それを小説に書いている。

この正宗さんと、よく目黒の三井銀行で会った。

大きな声で、「君、今月の歌右衛門は、どうだね」といったりするので、みんなが、びっくりして見ている。

□

正宗さんのことでは、これは尾崎一雄さんが書いているのだが、軽井沢の喫茶店で、志賀さんの子供さんたちとアイスクリームを食べているところに、正宗さんが

はいって来て「アイスクリーム」と注文した話がいい。

ちょうど、尾崎さんたちのところで、アイスクリームが売り切れたわけだったのであるが、店員が「アイスクリームはありません」というと、だまってこっちのテーブルをじっと見ていて、プイと出て行ったというのだ。

正宗さんが、目に見えるようだ。

深沢七郎さんが、正宗さんを訪問して、「菊正宗はお宅で作っているのですかと質問したと伝えられる。

□

正宗白鳥さんが、歌舞伎の新作脚本を見物していた。

つまらない筋で、セリフもよくない。

幕間まくまになったら、正宗さんは、隣にいた連れに聞かせるともなく、つぶやいた。
「こんなセリフを覚えるなんて、頭脳の浪費だな」

□

佐藤春夫さんが、「文藝春秋」に文芸時評を書いた時、とりあげた作品の作家全部に、「先生」という敬称をつけた。大変皮肉だった。

中村光夫さんと論争をした時の文章の題に、「おうい中村君」

もっとも、この題の歌謡曲はもう忘れられかけているから、後世には、意味が通じなくなるだろう。

□

志賀直哉さんは、年配の女友達を、「ばある・ふれんど」といった。
シャレをいわない人では、なかった。「赤西蠣太」の恋人が小江こえというのも、つまり、そういうウィットである。

佐佐木茂索さんが芝の城山町に越したと聞くと、こういったという。

□

「城山の西郷さんにならないように、気をつけて下さい」

佐佐木茂索さんが、副社長の池島信平さんをひどく叱ったら、池島さんがいった。
「佐佐木さん、私には、もう孫がいるんですよ」

□

講演旅行の先で文士が小唄を歌って聞かせていると知った佐佐木さんが、電報を打った。

ムシノネヤキイテヤルノモボダイシン

□

池島信平さんが、佐藤春夫さんに、

「先生は少年時代、どっちかというと、不良のほうではありませんか」といった、いつものように、ニコリともせず、

「進歩的といって下さい」

□

三好達治さんが、巖谷大四さんに語った。

「私の随筆集に『夜沈々』^{よふぐんぐん}というのがあります。あれは家賃々々なんです。もうひとつ『風蕭々』^{かぜしやうしやう}というのがあります。貸せ少々なんです」

□

内田百閒さんに、「阿呆列車」という連作がある。

旅行が目的ではなくて、国鉄に乗るのが楽しみなのである。いつも平山三郎さんが同行した。文中ヒマラヤ山系というのは、平山さんである。

グリーン車の出来る前である。ある時、いつものように、一等車が当然とてあると思った百閒さんは、あいにく先約が満席で、一等がとれませんでしたというのを聞いて、烈火のようになった。

それで、国鉄当局としては、あれこれ苦心して、やっと一等車の席を用意した。

名古屋から乗りこんだ百閒さんは、すぐ食堂車にはいり、連れとビールを飲み出してご機嫌になり、気がつくと、東京に着いていた。

□

作家によって、独特の用字法があるのを、知っておいたほうがいい。

夏目漱石は、サンマのことを、秋刀魚とは書かず、三馬と書いた。「浮世床」を愛読したためかも知れない。

泉鏡花は、豆腐の「腐」がいやなので、「豆府」と書いた。この作家は、煙草は、もっぱらキザミだった。

久保田万太郎は、「泉先生の豆府の府の字は、水府（愛用のきざみ煙草）の府から来ている」といった。

斎藤茂吉は、絶対を、絶待と書いた。森鷗外のみそみにならったのではあるまいか。内田百閒のボーイは、食堂やホテルのボーイのことだが、これは漱石流である。

□

この内田百閒さんは、新仮名づかいを決してみとめない作家だったので、すべての新聞が新仮名になってからは、原稿依頼を一切こわっていた。

まだ「仮名づかい原文のまま」という除外例の許されない占領時代に、百閒さん

の氣に入っている記者が来て、百字ほどのコメントをぜひお願いしますと、懇願した。

身びいきの強い百閒さんは、とうとう承知したわけだが、できあがった原稿は、終始旧仮名で、しかも新しい表記と一個所も、矛盾していなかった。

□

内田百閒さんがいつか、憤然として、こういう話をした。

「うちの近所に、盲学校があつて、目の不自由な子供たちが、歌をうたっていた。

『白地に赤く日の丸そめて、ああ美しや日本の旗は』——めちやくちゃです。腹が立って、泣きそうになりました」

まったく、無神経な話である。

それで思い出したのは、ずいぶん前だが、テレビを見てみると、森繁久弥さんが、やはり目の不自由な子供たちの前で、歌っていた。

「七つの子」という、童謡である。

「からす、なぜ鳴くの。からすは山に、かわいい七つの子があるからよ」と歌って行く。

二番は「山の古巣へ、行ってみてごらん」というのだが、森繁さんの表情が一瞬

こわばった。舞台に出ていて、セリフが思い出せずギクリとしたような感じの顔だった。

なぜそんな顔をしたのかが、すぐわかった。森繁さんは「まるい目をした、いい子だよ」という歌詞にぶつかって、困ったなと思ったのであろう。

しかし、歌は、わずかなタイミングのずれはあったが、「まるい顔した、いい子だよ」と歌われたのである。

□

山本有三さんが率先して、漢字制限を実行した。

筆名自体に、使えない文字を持つ日夏耿之介さんが憤慨していった。

「われらの国語を、路傍の石のごとく動かすのはやめろ」

□

谷崎潤一郎さんが、ジャン・ギャバンという俳優の名前を評して、

「ハサミの落ちる音みたいだ」

ジャン・マレーを、ジャム・ママレード、ラナ・ターナーを、ダンナ・サーマ、ロナルド・コールマンを、ドナルト・オコルマンなどともいったそうだ。

「細雪」の中で、ウィンナ・シュニッツェルのことを、シュニッツレルと書いてい

るのは、作家の名をつい思い出したのかも知れない。

□

小宮豊隆さんは、初代中村吉右衛門の話をしている時以外は、どちらかというと、無表情で、こわい人だった。

その小宮さんで、おかしい話がある。

終戦直後に、バスのステップのところに乗るようなまわり合わせになり、ふりおとされた。

その時、若者がかけ寄って、「おじいさん大丈夫ですか」といったら、「おじいさんとは何だ」と怒ったというのである。

しかし、これは、その若者から誰かが聞いたというほどのデータもないわけなので、伝説かも知れない。

お洒落しやれの小宮さんが、老人といわれるのを厭いとがっているのを知っていた誰かが、こしらえたフィクションではないだろうか。

この話を、小宮さんと親しい小泉信三さんにすると、小泉さんは、「ぼくの聞いているのはちがう」といった。

「大丈夫ですか」と若者がいった時、小宮さんが、「大丈夫だ、と思う」といった

ら、「と思うとは、なんだ」と怒ったというのである。どっちかが、怒ったことは、なっているのである。

□

小宮さんは、セピア色のインキで、いつも書く人だった。

ある時、新書判の「夏目漱石」を下さることになって、そのインキを入れた万年筆で、ぼくの目の前で、見返しに署名をされた。

「戸板康三様」と書かれたので、思わず「アッチがいます」といってしまった。

小宮さんは、そういったぼくを鋭い目で、しばらく見つめていたが、三の字の一番上の棒を右にのばし、タスキをかけて、点をポンと打った。

それで、「戸板康三様」ということになってしまった。

□

西脇順三郎さんに慶応で、言語学を教わった。

次から次と、うまい発音で、英語の単語が飛び出す。

突然、先生は一番前の学生に、訊いた。

「よく公園でのませる、あの白くて温い飲料、あれ何といいましたかね」

「甘酒ですか」と学生が答えた。